#### 外国人の人権尊重に関する実践事例

## 1. 基本情報

〇都道府県名及び市町村名

奈良県磯城郡川西町

○学校名

川西町立川西小学校

O学校のURL

http://www.town.nara-kawanishi.lg.jp

## 2. 学校紹介

〇学級数

【通常の学級】15学級、【特別支援学級】5学級、【合計】20学級

〇児童生徒数

【全児童数】440人(平成28年11月1日現在)

(内訳:1年生75人、2年生66人、3年生83人、4年生63人、5年生72人、6年生81人)

〇人権教育開発推進事業、人権教育研究推進事業実績(実施年度及び事業の別)

特記事項なし

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】

気づき、考え、学び合う、心豊かな児童の育成、すなわち「生きる力」を育む ことを重視した教育を推進する。

【人権教育に関する目標】

人権が尊重される学校文化を創造し、自他の人権の実現と擁護のための必要な 意欲と実践力をもった児童を育成する。

〇人権教育に係る取組一口メモ

文化や言葉の違いを知り、それを尊重しながら生活していこうとする態度を育てる。

#### ○人権教育に係る取組の全体概要

- 人権教育推進部(人推部)を中心として人権教育推進計画を立案し、取組に当たっては全教職員の共通理解のもとに実践している。基本方針として「『やさしさ』を育てる、『人権意識や人権感覚の基礎となる力』を育てる」及び「自他の人権を大切にしようとする意欲・実践的な行動力を養う」を挙げ、具体的な取組を推進している。
- 学年ごとに人権目標を定め、年間の取組を通じてそれぞれの領域ごとの目標が達成されるようにPDCAサイクルを活用している。また、全校での取組として「全校なかま集会」(年3回)や人権教育授業参観、「自分探しアンケート」(年2回)、「やさしさポスト」の設置、自己肯定感を高める取組、コミュニケーションカ向上のための取組、職員研修会、地区別懇談会、進路保障委員会、児童実態交流会を実施している。

## 3. 実践事例の内容

(取組のねらい)

- ・様々な国や地域の文化に興味・関心をもたせ、異なる文化についての理解を深める。
- ・外国につながりのある友達やその保護者の願いを知り、それぞれのアイデンティティを尊重しながら、共に学び共に生きていこうとする態度を育てる。

### (取組を始めたきっかけ)

本校には、外国につながりのある児童が複数在籍している。それぞれの国籍や家庭状況は異なるが、そのほとんどは、小さい頃から日本で生活をしており、幼稚園や保育所も共に生活をしてきた。

Aさんは、2年生のときに中国から来日した。本校に転入してきたAさんは、 親しくなった友達には「私、中国人やねん。」と話していた。

ある日、Aさんが泣いて教員に訴えてくるという出来事があった。内容を詳しく尋ねると、Aさんが級友に対して「ちゃんとして。」と注意した際、「うるさい。だまれ、中国人のくせに。」と言われたということであった。すぐに、当該の児童から事情を聞き、「Aさんの気持ちを考えよう。」と指導をした。その後、管理職、校内人推部に今回の出来事と指導内容を伝え、学校としての多文化共生の有様をふり返り、更なる深化・充実に向けて取組を進めることを確認した。

#### (取組の内容)

## 【4年生の取組】

#### ① 調べ学習

導入として奈良県教育委員会発行の人権教育学習資料集『なかまとともに』 所収の「外国につながりのある友だち」を活用して学習を進めた。その後、 外国につながりのある友達に関わりの深い国を取り上げ、それぞれの文化、 言葉、食べ物についてグループごとに本やインターネットで調べ、パソコン を使って発表した。

## ② 家庭訪問で保護者の思いを聞く

家庭訪問を行い、外国につながりのある児童の保護者に、「外国につながりのあることをみんなに伝えてもよいかということ」と「学校で多文化共生について学ぶ取組をしていくこと」を伝え、保護者の思いや願いを聞かせてもらった。「中国人のくせに」という発言をした児童の保護者にも取組について話をして理解を求めた。

#### ③ 外国語活動の時間

2 学期の外国語活動の時間に、2 人の日本語指導担当教員からそれぞれ中国語、スペイン語を教わった。また、言葉だけでなく、それぞれの国の文化や学校生活、遊びなどについても学ぶ機会となるよう内容を工夫した。

さらに、外国につながりのある友達の思いを知ることが何より大切であると考え、中国語を学んだ時間の最後に、Aさんが書いた作文(【資料】「中国から日本に来た私」)を読んでもらい、その思いや願いについて考え合った。

#### 【学年から全校へ】

4年生から、学校全体へ発信するために「全校なかま集会」を開いた。

- テーマ 友達のつながりのある国のことを知ろう
- ねらい
  - ・中国、ペルーの文化や言葉について親しむ。(異文化理解)
  - ・違いを認め、尊重し合う気持ちをもつ。(共生)
- 〇 内容
  - ・中国、ペルーの紹介(4年生担当教員)
  - ・中国語、スペイン語と出会う(日本語指導担当教員) 挨拶などを教えていただく
  - ・作文の朗読 【資料】
  - ・4年生児童の発表(歌、漢詩、リコーダー) リコーダー演奏「コンドルは飛んでゆく」(ペルーの歌) 歌「子どもの世界」(日本語 中国語バージョン) 漢詩「偶成」(中国語での朗読)
  - ・保護者の言葉
  - ・校長先生からの話





### 【資料】

〈Aさんの作文〉

#### 中国から日本に来た私

私は日本で生まれて、1才ぐらいで中国に行きました。なぜかというと、私のひいばあちゃんが日本人で、ひいじいちゃんが中国人です。だから、私には中国と日本の血がまざっています。おじいちゃんやおばあちゃんは、私を8才まで育ててくれました。私は日本に来て初めて小学校に入ってきたのは2年生の2学期の終わりでした。

その時は何もわからなくって、ひとりぼっちでした。私は人と話すのがとっても苦手で、みんなが何を言ってるのかもわかりませんでした。それに6年生にいやなことを言われて、いじめられた時もありました。でも、3年生になって中国語の先生にいろいろ日本のことを教えてもらいました。それで、私はかわりました。家でもいっぱい勉強しました。それからの1年間、私はがんばったので、友達といっぱいしゃべれるようになって、学校が楽しいと思えました。

4年生になって、川西小学校に転校してきました。クラスの人数が多いので、 びっくりしました。今は、日本語を話すのも困ったこともないし、たくさんの 友達もできて、とっても楽しいです。みんなの言っている言葉がわかり、日本 のことをいっぱい知ってどんどん友達をふやしたいです。

#### 〈Bさんの作文〉

## ぼくはペルー人

ぼくは、ペルーでうまれました。うまれて3年がたち、日本にきました。日本にきたきっかけは父さんが日本にすんでて、ぼくは、ペルーで住んでいました。それで、母さんとぼくが日本にきました。そして、ぼくはさいしょにおぼえた日本語は、「おはようございます。」です。それは、ようちえんで毎日一番はじめにいうからです。ぼくは、ようちえんで日本語をおぼえました。さいしょは日本語をおぼえるのはむりだとおもいました。だけどぼくのよそうはまちがっていました。日本語をはなすのはかんたんでした。それで、小学校に入ると、日本語をぺらぺらしゃべれるようになって、みんなと話がたくさんできるようになりました。友だちもできました。でも、漢字を読むのはむずかしいです。4年たっても漢字をなかなか覚えられません。でも、がんばりたいと思います。

2年生のころにペルーに旅行に行ってきました。こんどペルーに帰ったときは、日本にもどってこないらしいです。お父さんやお母さんが言っていました。日本にいる間、楽しい思い出をたくさん作りたいです。4月に弟の○○が入学してきます。ぼくは兄ちゃんとしてがんばります。

# 4. 実施する際に生じた課題及びその解決策

## (課題、課題が生じた背景)

作文を全校生の前で読むことに対して、2人とも自信がない様子だった。特に、Aさんは、「全校なかま集会」の前日、「全校のみんなの前で発表するのはいや。みんなに中国人やということを知られたくない。Bさんは、見たらわかるけど、わたしは言わなかったらわからないから。」と言った。以前在籍した学校で、たどたどしい話し方を上級生に指摘され嫌な思いをしたことがあり、大勢の前で話すことに自信がなかったのである。自分につながりのある国や文化、そして自分自身のことをも肯定的に受け止められずにいるように感じられた。しかし、これらのことは、AさんやBさん自身の課題ではなく、彼らを受け入れる側の課題であると考える。国籍を問わず、すべての子供が安心して学校生活を送ることができるように、学校全体として多文化共生の視点に立った取組を一層推進していくことが必要であると考える。

## (課題に対する対応)

- ・Aさんには、Bさんががんばろうとしていること、一緒にがんばってほしいという担任の思いを伝え、保護者にも連絡を入れた。Aさんの母親は、「うまく読めなかったら、どうしようと思っている。でも、できたら、本人の自信になると思う。」と答えてくれた。その後、家庭で両親が「今、中国人ということを隠しても、ずっとみんなに知られないままでいることはできない。中国人であることは本当なのだから、それを恥じることはない。堂々としていたらいい。」ということを話され、Aさんを支える力となっていた。
- ・学校では、「がんばって」という学級のなかまの応援があり、プレッシャーとも なった反面、大きな励ましになったように思われる。
- ・「全校なかま集会」の最後にAさん、Bさんの保護者に「親の思い」を話しても らった。2人とも、本当の思いを子供たちに伝えるために母語で話されたので、 日本語指導担当教員が通訳をして伝えた。

## 5. 実践事例の実績、実施による効果

#### 【子供たちの感想】

- 調べ学習について
  - いろいろな国があって、いろいろな食べ物があって、いろいろなくらしをしていて、とてもおもしろかったです。
  - ・わたしは、中国を調べて、中国にはすごい料理があるし、有名な場所がいっぱいあるんだなと思いました。中国の言葉は、日本よりむずかしいなとおもいました。

## ○ 外国語活動

- ・中国のことを習って、中国ってすごいんだなあと思いました。二胡という楽器で「涙そうそう」「君をのせて」を演奏してもらいました。中国のおもちゃも見ました。Aちゃんが書いた作文を読んでくれました。外国から来た人たちはみんなそうなんだろうと思いました。いやなこともあったんだろうと思いました。
- ・林先生(日本語指導担当教員)に中国の遊びや歌、楽器など色々なことを教えてもらいました。色々わかってうれしかったです。中国語も日本語も話せる先生がうらやましいです。ぼくも中国語を話せるようになって、中国に行ってみたいです。

#### ○ 全校なかま集会について

- ・今日のなかま集会では、外国語の勉強、そして国同士がなかよく差別しないことの大切さを改めて学び、感じました。AさんとB君の発表を聞いて、胸が熱くなりました。また、お母さんたちの「お友達がなかよくしてくれることに感謝します。」というメッセージを聞いて、外国人に対しての差別は絶対にしてはいけないことで、それによって家族が悲しむということがわかりました。そしてわたしは、Aさんとそのお母さんと親しいので、これからもなかよくしていこうと思いました。「子どもの世界」「コンドルは飛んでいく」を聞いて、差別をしないことを心に誓いました。
- ・わたしは、このなかま集会で、改めて「○○人だから~」「○○人のくせに~」「○○人なんだから~」などと外国人に対する差別は、絶対にしてはいけないと思いました。差別をしたり、外国人の悪口をネットに書き込んだりする人がいるそうですが、わたしは、その人たちの気持ちが全く分かりません。やめてほしいです。

この取組を通して、子供たちは外国の文化や生活習慣などについて、多くのことを知り、理解を深めることができた。また、身近に暮らす外国の人たちの思いに触れることにより、互いの違いを認め合いながら共に生きていくことの大切さを学ぶことができたように考える。さらに、外国につながりのある児童が、自信をもって自分の思いを語り、安心して学校生活を送ることができるようにもなってきている。

## 6. 実践事例についての評価

(取組についての評価、及びそう評価する理由) 様々なところで「つながり」ができた。

○ 子供同士のつながり

「もっとなかよくなろう。」「互いのことをよく知ろう」という態度が培われた。

○ 親と親のつながり

同じ中国籍の児童の保護者同士が連絡を取って話すことができた。

○ 子供と親のつながり

お母さんたちの「感謝しています。なかよくしてくれてありがとう。」の言葉を聞き、涙を流す姿を見て、親の思いを知ることができた。

○ 子供と教員のつながり

教員に自分の思いを話すことができた。

○ 保護者と教員のつながり

教員が保護者の思いを知ることができた。

(現在、実施に当たって課題と感じていること)

子供たちの関係においては、国籍に関わらず、共に仲良く生活することができているように思われる。しかし、子供たちを取り巻く地域社会には、「外国人」に対する画一的なイメージが存在し、そのことが子供たちの意識や言動に少なからず影響を与えている現実がある。多文化共生の取組を学校だけのものとせず、家庭や地域と連携・協働した取組として進めることが必要であると考える。

将来にわたって様々な国や地域の人々と出会っていく子供たちにとって、今回の 取組が、多様な文化をもつ人々と「つながり」、違いを豊かさとして捉え、互いを尊 重した生き方を具体的に展開していくための力となることを期待する。